

○司会者（瀧川）

今こちらに参加されている方々はAコースということで、午前中の基調講演を聞かれて、そして、昼からは先生の講座という形で、ちょっと深く学んでいこうと考えられている方々かと思います。時間的には1時半から3時半までとなっております。

先ほど打合せをさせていただいたんですけども、まずは午前中の中で質問が30点ほどありました。なので、それを整理いたしまして、それについて先にお答えいただこうと思っております。

その次、私から質問を投げかけさせていただいて、順次お答えしていくやり方をさせていただこうと思います。その際、午前中の資料、これは先生が使われた資料なんで、使われるとお聞きしました。こちらはまだ手元に持っておいていただければと思います。

そして、その区切りがつきましたら、今度はフロアの方々から臨機応変に質疑応答ができるべとお伺いしておりますし、一方で、先ほど話し足りなかつたことを、もうちょっとじっくり御丁寧にというところを説明していただこうと思っております。

それでは、無藤先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、早速ですけれども、私は前ではなく、こちらの横に来させていただきまして、お答えいただこうと思っております。

最初に質問で結構多かったのが、先生方一人一人、保育者一人一人、考え方には違いがある。同じ方向に向いていくためにはどうしたらいいかということだったり、せっかくの学びのあった「愛と知の循環」ということが、職員間で連携したり、協同していくために、どのように共通理解していったらいいんだろうかということが質問に上がっておりました。また、複数担任であるがゆえに共通理解は難しいですということとか、例えば、公立保育所で異動があるたびに、また最初からスタートしてしまうということがありました。

そこで、先生の今回のお考えを職員間で共通理解したり、職員間で研修していって同じ方向に向いていくためにはどうしていけばいいんだろうかということについて、先生のお考えを教えていただければと思います。よろしくお願ひします。

○無藤氏　園の保育というのはチームでやっているので、当然、みんなでやる以上、みんなが同じ方向を向いて、研究なり、誰か勉強してきたことを、この中で共有して進んでいこうというものですが、先ほど、最後にも話したように、基本的に外で学んだことを園の中ですぐ使うという発想が駄目なんで、それはもうムリゲーです（笑声）。

でも、学ぶことは意味があると思いますけれども、それが徐々に消化されていって、いろんな園を見てきて、やはり3年以上はかかるよなと思うんです。今の園の現状を見ますとね。ですから、かなり一生懸命やって3年はかかるなと思います。5年くらいかかるというのもあって、5年も考えたら、職員が全部入れ替わっちゃいますと言われたこともあるんですけど、そういう点もなくはないです。

今日はここまで話さないですけど、職員、保育者たちをどうやって引き止めるかとか、離職するにしても、戻ってきてもらうとか、いろんな工夫もチームとしての園の在り方の一つ。今日はそういう話ばかりしているんですけど。

端的に言うと、園というものがあって、ある程度、クラスというのは、どういう呼び名でもいいけど、あるわけです。だから、それぞれの担任のある程度の分担はあります。違いはいろいろあると思うけど、一応普通の園舎があって、職員室があって、園庭があるみたいな想定をしているんです。まず当たり前なんだけど、当事者が集まって話す時間がなきや駄目なので、それも取れませんと言われるともうしようがないので、まず集まる時間をつくりましょうということだけど、集まる時間というのは、毎日のことと、例えば、学期に一回とか、保育園に学期という発想はないけど、まあ夏の比較的子どもが少ないとか、長めに取るとか、ということの組み合わせです。日々どのくらい取れるかは園によるので、忙しいところは10分だし、特に幼稚園なんかは30分とか取っているところもあるし、あるいは週に1回とか、いろいろですけれども、いわゆるノンコンタクトタイムとかありますが、文字どおり全員じゃなくても、半数でもいいんですが、ということが第一に必要です。

そこが難しいという園は、保育の質を上げようという以前に、働き方改革をしたほうがいい。もうちょっとゆとりを持って働くようにしていくということなんです。それすらできなくてという段階で、余り高級なことを言わないほうがいいと思います。働き改革の基盤 という意味ですよ。ベースだから、逆に、余り浮かれて、いい調子のことをやつていて、そこが働き改革が弱くて、なんか残業が多いということで、ある日突然、がらがらっと崩れるのをさんざん見ましたが、やっぱりベースを固めたほうがいい。ということと、さらにおまけを言えば、この手の研修会に来るというチャンスを、いかにして全員に与えていくかです。もちろん、お金を出してあげるから行ってと言っても嫌という人もいるんで、単純に小さい子がいて忙しいということもあるし、本当に世の中いろいろだなと思うけど、「いや、私はそんなに勉強してまで偉くなりたくないです」「学校を出て、

本を読むとか、そういうことは一生しません」と。「字は読まないです」とか「書かないです」とか言われると、そうなんだけど、別に今どき字を書かなくてもいいんで、研修に来ても多少は学びになるのでということ。

もう一つは、講義風のこういうところに、皆さん、来るじゃないですか。こういうところに来て学ぶというのは、ある種の素質とは言わないけど、趣味嗜好というか（笑声）、ちょっと変なんですよ（笑声）。だって、学校じゃないですから。

どういう仕事にしても、世の中の3分の1は学校が嫌いなんです。不登校になるという意味じゃなくて、学校を出たからには、二度と学校ぽいところに行きたくない。黒板を背景にしゃべる人に会いたくない（笑声）。字ばっかりの本は見たくない。それで保育書って、かなりの写真が、毎ページにあるので、それに慣れてくるんですけどね、私の本は字ばっかりですが。

でも、保育者になる人は、多少はこういうものは見に来る。そうでないところ、子育て支援みたいなことで何か関連してやっていたときに、その人は図書館に従事していて、子ども向け図書、絵本とか、広くて、たくさんあるんです。そういうところにもっと行ってもらおうという話をしているときに、図書館の司書さんみたいな人が、来てもらうのいろいろやっているけど、来ない人は来ない。なるほどと、一人の人の発言に感心したんだけど、世の中の親の相当数は図書館の看板を見るだけで怖くて入れませんと。皆さんは勉強するほうの人だから分からないでしょうし、僕はもっと分からないんですけど、本が並んでいるんです、当たり前ですけど。並んでいるだけで、もう嫌だと。そりやそうですよね。ほとんどの人は高校プラス2年だとすれば、二十歳くらいまで学校に行っているわけでしょう。私の勤めてきた白梅学園大学というのは、保育士養成としてはそれなりの水準なんだけど、偏差値的にいうとピンからキリまでいるんです。キリという言い方は好きではないけど、特に推薦入試で入ってくる中には偏差値的に言うと差がある。そういう人と話していて、そうなんだなと思ったけど、高校まで手を挙げて指してもらったことはないです、聞かれたら下を向いています、指されたら「ううん……」と。黙っているか、分かりませんと言うと次を当てるんで大丈夫ですと言うんですね。レポートは写せばいいというのが、うちの大学だと1割くらいはいるんですけど、こっちでやたら自分で勉強している人がいるんですが、極端に分かれる。そうなのがなと。

今どきだから、保育を志す人の中にもいろいろいて、しかも、そういうふうに本を読まない人が保育が下手かといったら、そうでもないというか、勉強している人が保育が上

手かというと、そうでもないんで困るんです。大阪総合保育大学で有名な先生の話を聞いてきたと皆さんが園で言つても、皆さん方の保育が明日いいことになるなんてないんです（笑声）。下手になるかもしれないですよね。愛と知なんて浮かぶと体が動かなくなったり（笑声）。

ということを前提としてになるけど、私が具体的に助言するときの1つは、ともかくどんな人も——どの人もといつても、園によって十数名くらいの保育者のところと、中には50人いますとか、やり方は様々ですけど、規模として十数名とします。そうすると、ある程度それぞれの担任が一堂に会するとします。その頻度は何であれ。

そのときにやることとして、いわゆるお勉強よりは、いかに子どものことを語るかというところから始めるようにしてと言いますけど、今日もいろいろ例を挙げたり写真を最初に見せたりしましたが、ああいう子どもの生き生きとした姿とか、面白い姿とか、何かに夢中になっていたり、面白がっている姿を見つけることから始めるというのを割と言うんです。

上手に保育をするということの前に、子どもの様子をよく見ましょうねということなんだけど、そういうてもよく分からないので、何か子どもがしている面白いこと。面白いといつても、本当に浅いものでいいんです。子どもが言った変な冗談みたいなものがあるだろうし、あるいは、さっき上げたように、子どもが庭の隅でお花を見つけて「きれいだ」と言ってくれたよでもいいし、テントウムシを見つけたとか、何かつくっていて、こういうふうにしたらどうでしょう。本当に何でもいいんだけど、そういうことを話す場、まずこれが必要だと思うんです。

それを正式に○○会議でやるというのも園によってやればいいこと。園によって、もちろん集まるときに多分話すこともあるし、今日辺りお茶を飲みながら話して、その後やることもあるし、いろいろだし、本当に忙しい園なんかは、見ていると、結構立ち話をしながら、さっきおたくのクラスの○○ちゃんがうちのほうに来てこんなことをやっていた、変なことをやっていたよとか、非難とか自慢とかではなくて、あの子、面白いねみたいな話です。例えば、そういうようなやり取りが日常的にあちこちでできる。あるいは、立ち話をするのも何だから、ちょっと座ってとか、保育園なんかで全員集まるのが難しいにしても、5、6人が集まってちょっと話すとか、園長、主任を交えて話す。あるいは逆に、園長、主任が、手が空いているときにブランコを見て、○○君、こういうことを一人でやっていたけど、いいのか、駄目なのか？、何でもいいんだけど、そういうようなことが一

つはあるんです。それはチーム保育でもないんだけど、まずチーム保育が機能する風土といいですか、『子どものしていることは面白いよね』という感覚です。あるいは、子どものしている全部が別に面白いと言わなくてもいいけど、子どもが一日、何かいろいろなことをやっていれば大抵面白いことにぶつかるわけで、あるいは、子どもは真面目にやっていても、こっちが面白いと感じることもある。そういう子どもの面白さ、あるいは子どもがしている面白いと感じることをこちらが楽しむ気持ちとかです。

何となく春に畑に苗を植える前に耕す感じ。畑の土も、すごく固くなっていたら水も通らない。耕す、掘り返す。掘り返す中で、それぞれの人の気持ちが水のように染み通っていくということです。

そういう園を訪問すると何となく、最近はやりませんけど、安心する。中を見るわけです、30分くらい。何となく雰囲気の柔らかさとか、先生方も、お互いに向ける視線の穏やかさ。

逆もありますよね。「何か変なことをしているんじゃないの？」みたいな監視の目。そういうものがまず土壤、土です。入るということ。

その上で育っていく、よりよくなっていく芽を、芽生えるというときに、いろんな、こういうことをやつたらどうかな、ついつい勉強してきた園長、主任が言いたくなるわけだけども、実際に担任している人が何か言うということが大事で、こういうことをやってみたい。こういうことを全部指摘してほしい。こういうことをやりたいけど、園の庭のあの辺がうまく使えないのは困るから直せない？ その中には、かなり予算がかかることも考えるいろいろです。

例えば、ある担任がたまたま見学に行ったら、外廊下部分がテラスに替えてあって、よくありますね。ちょっとだけ屋根が、この幅くらいか、もうちょっと広いくらい。そうすると、部屋と園庭の間の部分を上履きで使えるようになっていて、割と遊びが、部屋の遊びと、園庭の遊びが切れないでつながりやすい。あるいは、雨の日にこっちができる。いろいろあるんだけど、「ああいうのいいですよね」と。園長が「そりゃいいよね、やろう」とはいかないわけ。普通の園で、そういうふうにするのに数百万かかると思うんですけど、それは非常にいい提案だと思って私もやりたいが、考えさせてくれ。真面目に考えてほしいということです。今年の予算は無理だし、私立の幼稚園だと、来年、3歳児全員入ってこうなるからやるかなとか、入園、数がちょっと減ったら駄目よとか、リアルな中でしか実施できない。けど、例えば、そういうことになるだろうし、もっと小さいいろいろ

ろなことはたくさんありますよね。

例えば、最近減りましたけど、朝来ると、シールを貼って、かばんを置いて、スマップに着替えて、見ていると、15分くらい結構かかるって、それで遅い子も出て来る。時間はそれそれなんだけど、なかなか全員がそろわないみたいなことがあって、そういうのは、その園で働いているとそういうもんだと思っていたんだけど、よそを見に行ったら、あつ、違う。そういう提案ですね。

これもある程度、先ほどのいい雰囲気をつくった上でないと、うかつにやると、やたら批判が出てくるんで、批判というか、不満というか、不満の言い合いになってしまふがないんで、私たちの園をよりよくするために必要なことで、すぐできること。また、予算がかかるから、すぐはできないけど、やってほしいことを出すということです。その中には、無理なこともあるし、いろいろでしょうけど、そのときに大事なのが、ベテランも若い人も、あるいは主任のような人も、『誰もが何かを言えるようにする』ということです。1つは言える。言ったらちゃんと、園長や主任は真面目に考える。そのとおりに実行することが賢明なのかはまた別なんですよ。

でも、少なくともそれを真面目に受け止めて、こういう理由で、そのとおりはできないけど、こういう形でならできるに違いない。そういうふうに考えていくということです。

そういう、ふだん毎日じゃなくても、週一でもいいでしょうけど、ある程度、ふだんやっている集まりのときに、基本的に前向きのことをやっていくんです。何をしてはいけないかというと、反省しているわけ。世の中に反省ほど無駄なことはない。反省して変わるくらいならとっくに変わっています。大抵の人は反省しても変わらない。なぜならば、なぜうまくいかを自覚していない。真面目な人ほど変わらないというよりは、無駄な努力です。

私は、本当に若い高校生を出たくらいのときに、友達に誘われてテニスを、全然うまくならないですよ。大学にあるテニスコートで遊んでやってみた。空いているときは素振りをやれと言われてやったけど、素振りほどくだらないものはないです（笑声）。後で気づきましたけど。

どうしてかというと、素振りすることで悪い癖が固定するんです。だから、素振りって駄目なんです。今どきは素振りなんてしないでしょう。ちゃんとボールを打って。ボールを打てたら、真っすぐ飛ばなきや駄目でしょう。だから、素振りって駄目なんです。

ということは、保育でも考えたってしようがないので、実際に体を動かして子どもと

やり取りすべきしか上達法がないんです。そこで、うまくいかないことは後で悩んだってしようがないわけです。微調整していくしかないんですし、反省というのは、何か落ち込むだけですから、元気が出ない。下手でもただ元気なほうがいい。ただ心優しい人のほうがいいんです。下手でも——下手じゃないほうがいい。下手でも、子どもが好きな人のほうが保育者向きだと思うんです。というか、子どもの前でにこやかな人のほうがいいということです。

そういうことがある程度進んできたときに初めて、外から助言者みたいな人に言われた一言、主任、園長の一言が、その人に入るわけです。だから、その外からの一言が入るまでに2年、3年かかる。外の一言が入るためにには相当信頼関係ができないと難しいです。

しかも、外から言うのは実は楽なんです。は、保育なんてしたことではないです。見ているだけ。でも、保育の場に学生を連れていくじゃないですか。後で大学に戻って話をする。結構辛辣なことを平気で言うんです。そりやそうですよね。理想ばかり見ているから、それと比べれば下手なのはすぐ分かるし、実際、へましているわけですよ、たくさん。先生がいろいろ説明している。こっちである子が、一人の子がこうつぶやいている。先生を無視しているとか。なんだけど、そういうのは野球で言えば、大谷が三振して駄目じゃんというのと同じで、野球で、野球を知っている人、3割何分だったらすごいんだけど。ということは、7割駄目なんですね。

保育者はたいてい7、8割失敗しているんですよ、あちこちで。そりやそうです。1人で10人、20人面倒を見る。相当無視しているんだけど、大体子どものほうが何とかするんです。「先生」と言っても聞こえない。自分でやるかみたいな、それでいいわけで、毎日やっているんだから、修復の機会は幾らもある。

チーム保育という高級な話じゃないんだけど、まずはそこら辺の風土、耕しを3年くらいやりたいなという気がするんです。長くなってしましましたが。

今日の予定としては、1時間以内というのは分からないけど、くらいにして、あと45分くらいかな、今のフロアにいる方から聞きます。不満、よく分からぬこと（笑声）。

○司会者 ありがとうございます。

今の話の中で、やはり土壤を耕すことから始まるんじゃないかということと、子どものことを語る、そこを見つけるところが大事じゃないかというところが今のお話の骨格だったかと思っています。

あと、反省ではなくというふうな辺りです。その辺も改めて肝に銘じておきたいなと思

ったところです。

では、次の質問は、ゼロ歳児のお話として、ゼロ歳の担任をしています。その子の遊ぶ様子がなかなか見られない。じゃ、そういうふうな子に何かを好きになるというふうな視点から考えたときにどうかということや、食事や着替えなどの生活場面なんかではどうなんだろうかというふうなことが質問にありました。先生、いかがでしょうか。

○無藤氏 ゼロ歳というか、ゼロ歳、1歳くらいで考えたいんですけども、ゼロ歳といつても、余り小さいゼロ歳は知りませんが、8か月くらいかな。簡単に言えば、8か月前後からハイハイするようになるわけです。ハイハイが始まるくらいだと思うんです。歩き出すのが満1歳から満1歳半くらいだと思うんですけど、要するに移動が始まる時期です。そういう時期に、どういうふうに子どもの様子を見ていくかということなんですけど、実はそのこととともに、ゼロ歳、1歳は大抵新しく園に入ってきて間もなくという場合が多いんです。それによって相当話は違うので、入園して1、2か月の子と、1年以上たっている子では同じ月齢でも話はまるで変わってくるわけです。

入園して間もないときの子どもの動きというのは、子どもの気質によってすごく違うんです。ものすごく違うので、ある程度経験のある先生方は分かると思いますけど、入ってきてすぐ動き出す子もいるし、すごく慎重で、数か月かかる子もいる。

あるときにある保育園で見ていたら、入園して1か月くらいと言っていましたけど、ゼロ歳、月齢的にいうと1歳過ぎだと思いますが、この数日でやっと保育室から出てきた。こういうテラスがある。こちらが小さい子用の庭なんです。ちょっと中庭風になって、靴を履き替えたり、そのままはだしで出でていったんですけど、やっとここまで来ましたという感じです。

ちょうど見に行った時間帯が10人までいないけど、それぞれがそれぞれに向こうに行っていて、担任は順番に見ているんで、その子にそんなに関わっていないんだけど、時々振り向いて、まだ余りなじんでいないんです。事情はよく分からぬけど、余り抱かれたくない感じの子なんです。その子がともかく出てきたんです。こっちで見ているんだけど、じっと見るとまずい。多分人見知りが強いから、こっちで園長とおしゃべりしながら、こら辺で見ているわけですけど、実はもう一人、遠くからカメラで動画を撮っているんですけど、それはそれで。

しばらくいたら、このくらいの段差を下りたんです。少し歩けたから、満1歳は過ぎているんでしょうけど、歩いているけど、こちらから離れずにいたんです。そうしたら、も

っと年上の、1歳児クラスだけど2歳くらいの子、その子が2人くらい来て、水道があるんですけど、そこで水を出してジャーっと流して、カップがあって、そこに水を入れたり、手でしばらく遊んでいたんです。それでまたどこかへ行ったんだけど、水は出しつ放しだったんです。それを見ていて、その子が自分で今度は手を出して、しばらくやっていたんです。しばらくやって、今度また数歩先まで行って、小さな庭の真ん中辺に行って座り込んで、足で砂地をこんなふうにやっていたんです。それを遠くで担任が見ていたのが、その辺で近づいてきて、このくらいの距離でしゃがんで、言葉にするようなしないような。言葉というか、「これは何ていう？」くらいの声です。しばらくやり取りして、多分担任は、その子の体の緊張を見ていたと思うんです。さらに、夏だったので、たらいがあって、水が張ってあって、ほかの子がそこに入って、しゃがんで水遊びをして、その子は立ち上がり、向こうに行った後に入って、しゃがみはしなかったけど、こういうふうにして出てきたりしています。

みたいなことがあって、終わった後で話したら、「今日はすごかったんです。やっと地面に下りたし、水に足をつけたし、地面にお尻をつけたんですよ」。なるほどと思って。

そういう、その子の言うならばミリ単位の変化みたいなね。こっちの子は初日からばばばっと上の年代の子のほうまで行っちゃうんですけど、単にたどってみればですよ。そこにすごく差があるんだけど、だからといって、何か月か先で、そんなには違わない。もちろん気質的に人見知りっぽい子は、やたらめったら年長の遊びに入ったりしませんけど、にしても、それなりに…なわけです。

だから、そういう子の、別に好きとか——私が好きになることは大事だと言い過ぎているようで、好きになる、好きというとちょっと重くなっちゃうんですけど、水道の水でちょっと面白がっているわけですよね。という、ちょっとしたその子の心の揺らぎというか、大人風に言えば何か面白いなくらいの2、3分の話です。

そういうふうに見ていくと、ゼロ歳、1歳で大したことやっていなくてというけれど、『動いているかもしれないよね』ということです。

もう一つの例は、保育園のゼロ歳児クラスに行って、秋だと思うんで、月齢的に言うと大部分の子が1歳代、大きい子でも1歳終わりくらいの子が10人もいない。ゼロ歳児クラスというのは、小さな部屋を2つつなげるくらい、広めですけれども、結構歩ける子たちは、その中をそれなりに動いている。端っこにちょっと、台みたいなもので上って下りるみたいな、いろいろあるんですけど、網、トンネルがあつたり、よくある、ボールを落

として、ぽとんとやるところとか、触ってざらざらしているとか、いろいろ手作りでしたけど、遊具がたくさんあるんです。

2人くらいの子が、後で聞いたら8か月と6か月といったかな、なんだけど、6か月の子は向こうでいるのですけど、8か月の子はしゃがんで座る感じと、あとはハイハイです。ハイハイなりに割と速く行くんです。じっと見ていたら、上の年齢の子がトンネルで遊んだり山を触る。それをずっと見ているわけです。見ていて、上の月齢の子が動いたら、その子がハイハイで近づいて、トンネルをのぞき込む。それで、また、ほかの月齢の子が、もう一つのほうに来て、そっちをしばらく見ていて、終わったら行くのね。全部ずれていこんで、やり取りじゃないんだけど、結構見ている。

まだそういう月齢だから、触って動かすことは余り上手ではないです。ボールを入れて落とすのだけはできているけど、ほかは、たたいたりしないですが、そういうのを見ていたら、この子は全部吸収しているなという感じですね。表情が変わらないから面白いんだけど分かりませんよ。けど、一つ一つ年上の子のやる遊びをチェックしているというか、自分が試している。

だから、そういうことも、その子にとっての極めて控え目な好奇心というか。だから、比較的そういうことで見ると、ハイハイするとか、そこでどういうふうに視線が動くかとか、そこで何を手に持つかとか、触るとか。触ることも結構ゼロから1歳にかけて意味がある、こういうものがあるというと結構触るんですけど、どれをどういう順番で触るかは、その子の興味の表れ。割と似たものに触るんです。別に同類と思っているかと言われると困るんだけど、あるいはちょっと集めるというか、いろいろなものがばらばら置いてあるものを寄せてみたいなことがあるんです。そういう非常に細かい動きに着目すると、ゼロ歳でも1歳でも、外への好奇心とか、興味とか始まっているということです。

だから、ただぼんやり寝ているって余りないんです。たまたま眠い日とか、そういうこともあるかもしれないですよ。もちろん中には何らかの障害のために発達が遅れている場合もあるかもしれませんけど、そうでないとすれば、もう動き出すというのはそのことが出ていますよね。

その上で歩き出すと、子どもにとって世界が一気に変わるんです。どう変わるかというと、1つは、つかまり立ちすることによって、テーブルの上でも見えるわけですよね。そういうふうに置かれていると、ある家に行ったら、多分意図的だと思うんだけど、1歳くらいの子がつかまり立ちすると、ちょうどその子のこの辺に台が来る。そこにいろんな

ものが置いてあるんです。明らかにたたくと面白い音にしてあるんだけど、そうすると、こうなってたたくわけです。つかまり立ちしたかいがあるという感じがします。

だから、家庭だと、すごく危険な状態で、食堂のテーブルにいろいろ置いておくと、いつの間にかつかまり立ちをして茶わんを取ったり、茶碗ならいいけど、お湯の入ったものをつかんだりするのはありがちなんです。つまり、ハイハイしている子にとって、こういう世界、下しか見ていない、突然ここが見えるんです。いや、三次元になるでしょう。

そこに今度は歩くという動作が入ってくると、歩くというのはもちろん訪問的なもので、身体運動としてプログラムを持っていることも多いんです。なんだけど、同時に、歩くことによって、最初は尻餅をついたり、いろいろしますけれども、歩き出しますよね。そうすると、当たり前だけど、物に近づくわけです。自分の興味があるものに近づくことです。周りの子どもとか先生も、歩き出すと、実はハイハイより表情が見えるんです。立つ姿勢になる。ハイハイは、こうなっている（ハイハイで下を向く姿勢を示す）。だから、特にほかの子にとっては自然に見えるわけで、呼びかけるんです。名前を呼ぶことができます。

さらに、姿勢がもっと安定してくる、動作が安定してくると、これが決定的に重要なんだけど、手が空くんです。その前の歩き出しへ、手でバランスを取るから持てないんだけど、足が安定してくると、手が空いて持つことができます。

1歳代の子は、持つと大体渡すんです。私なんか見ていて、くれるから、はいと受け取ることが結構あります。上げたいわけではないのかな。つながりなんでしょうか。それをお互いにやるようになるから、急に仲間関係ができますね。だから、ここでも、今立ち上がったら、最初は尻餅つきますけどね。そこから、ある程度歩行が安定するのは1か月はかかるけど、見ていると毎日変わっていくんです。同じようにふらふらしていても安定感がね。足が安定してると視線が定まって部屋の向こうが見えるんです。向こうが見えれば、そっちに近づこうとするわけです。届かない場合には、相手が持ってきてくれる。言葉にはできないけど、声で「あーん」と。ちょうど満1歳くらい、指差しが通常です。指差しというのは、こういうふうに手でやるか、1本指でやります。そうすると、先生が何か欲しいらしいなと思って持ってきたり、近づけてあげたりするでしょう。そうすると、1歳半ば以降が急速にやり取りが活発になります。それは8か月から満2歳くらいの変化というのは、日々変化するし、3日くらいではつきり変わる、変化が見えるはずです。

だけど、さっきから言っている、お子さんによって、その変化がミリ単位。こっちの

子は5センチ、10センチ、でっかいみたいなことで、見えやすい子をつい見ちゃうんだけど、そういうミリ単位の微妙な変化。

それから、やっぱり小さい子は緊張度が違うので、表情がすごく、ほほ笑みが豊かになり、すぐ出る子と、愛嬌がいい子。それから、なかなかそうでもない子もいます。そうでもない子は、表情が出ない、そういう子なのかというと微妙で、基本的には人見知りなんです。親御さんが迎えに来たときに見たときとか、たまたま近所で親子が買い物をしているとき、連れているときの子どもの表情が保育園のときと全然違うわけです。そういう細かいことを見ていくことによって、子どもの発達の問題でもあるけれど、同時に子どもが何を面白がって、何に興味を持つかというのが見えてくる。子どもの視線で手を伸ばしそうになってきたらそばに、歩けないうちは置いてあげて、手が届くところに何かをやれば触ったりというようなことをやるようなことで、ゼロ歳、1歳のクラスの部屋の動きが変わる、ですかね。

○司会者　　ありがとうございました。

今の乳児の目線、立つ辺りから視野が広がってというふうな話がありましたけれども、そんなふうにミリ単位で子どもたちは変わっていくし、急激に変化する子ももちろんいるという中で、今度はちょっと先の話として先生にお尋ねしたいと思うのが、保護者に対して、そういうふうなことをどう伝えていけばいいんだろうかということであったり、小学校の先生方に今のような話をどう伝えていけばいいのだろうかということについてのお考えをお聞かせいただけますでしょうか。

○無藤氏　　保護者の場合に、特に年中くらいになると調和を意識するし、楽しく遊んでいるのはいいんだけど、「ずっと遊んでいるだけでいいんでしょうか」みたいなことが気になるわけですよね。

笑い話のような本当の話ですけど、最近、連絡帳は余りなくなってきたが、その連絡帳です。「今日、砂場でみんなと一緒にになってすごい頑張って穴を掘ったりして楽しくやっていました」と字が書いてあるわけ。楽しくやっていて、いいんですけど、保護者からすると、でも、砂場で樂しいって、3歳とか4歳のときにも見ていたな。5歳の砂場って、大丈夫かしら、うちの子と思うのは自然じゃないですか。保育する側からすると、3歳のときの砂場のレベルと5歳の砂場のレベルは違うよ。5歳では海に見立てるとか、山にするとか、中には、海に見立てた上で、屋根をつくった船を浮かべて、ここは港です。いろいろ手の込んだことをやっているんです。

以前、砂場遊びで一番すごいと思ったのは、それも福井の附属幼稚園の話ですけど、5歳の子が数名で、砂場で1メートルくらいの高さの山を一生懸命つくっているんです。山を頑張ってつくるんだな～と見ていたら、すぐそばに水道があって、ホースがあつたんですけど、それを山の中に組み込んで、さらに砂をかぶせてやって、それでホースの先が上から出ている。どうするだろうと思ったら、ぱっと蛇口をひねると、きゅっと出る、「噴火」と言って。そうしたら、見ている十数名の大人たちが一斉に拍手して、さすがにすごかったと言ったんですが、見事に噴火したんです。

噴火した水が周りに行って温泉と言っていましたけど、そのくらい計画的にやるのがすごいですね。山をつくったときから、その子は考えていた。一人の子が中心で、あと数名で。そこまでいくことは滅多にないんだけど、やっぱり同じ遊びのように見えても、そこにおけるこだわりの精密さみたいなものは大分変わっているでしょうね。

今日も最初に話した電車ごっここの2つの新幹線ががちっと連結がうまくいくようにするのは年長なんんですけど、そういうすごい、その年齢らしく精密になっていくから、複雑になっていくということを、やはりきちんと捉えて伝えていく必要があって、最近だとそれは写真でできるようになっていて、かなり分かりやすいです。今までの話は言葉だけだった。だから、毎日、別にやらなくてもいいとは思うんだけど、そういう目立ったところはちゃんと伝えていくということが第一に必要です。

もう一つ必要なのは、これは小学校の先生たちにもそうだけど、そういうふうに子どもたちがやっていることが、実は将来の小学校の教科の勉強のいろんなところにつながっているよという話をしていくなければならないわけで、ある園に行ったら、秋の木の実とか、ドングリとか、落ち葉を集めていたんですけど、今もありますね。その園はいろいろなドングリの木があって、何種類も木があって、お散歩のときもドングリを拾ってくるんだけど、それがあるて、それを子どもたちで種類を、明らかに違うものを分けて、さらに分けてやってますけど、落ち葉のほうはいろんな種類があって、さらにいろんな色があるんで、それを色の濃さに対応して並べていくわけです。それで、例えば、シイとかコナラとかあるでしょう。それを今度は一人の子が幾つあるか数えたいので、一さお？にどどっと入っていて分かんない、数えられない。それで先生が牛乳パックを持ってきてあげて、それを用意する。牛乳パックって10個ですね。そこに入れる、10個ですね。それに小袋を用意して、これはちょっとやり過ぎという意見もあるんです。微妙なところですけど、先生のほうは仕組んでいるんですよ。仕組んでいるというか、そう子どもが言い出すのを待

っていたんです。だから、10個になつたら入れるんです。

そうやってやると、10の単位のものが6個と幾つかで、六十幾つて分からんだけど、10個が6個集まって、あと5個ありますみたいな感じでやって、○○が一番多かったとなるんです。それでどうだということはないんだけど、子どもにとってどれが一番多いかというのは重大な問題なんです。それを数にしたら、子どもたちにすごい納得感があるんです。

という話を小学校の先生に話すと、「そうですか」とやたら納得する。どうしてかというと、10の単位は小学校1年生で割と重大な問題、面倒くさい問題なんんですけど、10の単位が成り立っていく、教えるわけです。なるほど、そうやるのかみたいなことです。

私の好きなもう一つの例は、お買い物ごっこ、お金の話です。これも例が古くてお買い物ごっこで、商店です。それで、値段をつけて、お金を使ってお釣りを出すということで、古くなった理由が、最近の子はピッとやってお金をつくってくれないんですけど、本当に残念ながら。

とにかく、つくっている場合に、10円、50円、100円、500円、1,000円と、それでやり取りしている。お金のほうはお客様に上げるのね。そこではたしか5歳がつくったものを、3歳のお客さんを呼んできて、3歳にお金をお小遣いと言って。「これ」というと、「これは100円です」「200円です」と子どもが言って、3歳はよく分からんだけど、適当に出してみたいなことをやっているんです。そうすると、大体100円なんだけど、中には1,000円出すと、1,000円じゃ、お釣りをたくさん上げなきゃねみたいなことで、商品を上げて、とにかく100円のものを適当にあげるんです。900円のはずなんんですけどね（笑声）。

だけど、そこで分かっているのは、10より50が大きくて、50より100が大きくて、100より1,000が大きいことは分かっているんです。正確に、100が10個集まって1,000はまだ分からないです。分からんだけど、何となくそういう大ざっぱ。つまり、幼児の数の概念というのは、1から始まって、2、3というのは1個ずつ増えていきますけど、多分、20とか、子どもによっては50くらいまで1個ずつ数えるんですけど、そこから始まって、例えば、50くらいまで来て、あと、60、70、80、90、100、1,000となっていて、もちろん間違っているんだけど、こういう数が大きくなっていくというのは正しいんです。1個ずつ増えない先も、50の次は60じゃなくて51ですけど、数の体系として。でも、50の次、60も、あながち間違いないでしょう。数が大きくなつたという意味では。

というようなことをある程度承知していると、こんなことは一々教えなくてもいいんですけど、年長の子はそのくらいできていますが、小学校の先生は知らないわけです。別に、こういうことを黒板に書いていって教えているなら誰だって分かる。そうじゃなくて、お金の数え方とか、ドングリの数え方とかいう中にある。そういう幼児の知っていることというのは、実物とか遊びの中なんです。

小学校の算数は1、2、3と1ずつ増える数の体系でしたでしょう。だから、レベルが違うのと、そのベースが幼児期にあるみたいなことを小学校の先生に伝える必要がある。この辺は、ある程度、こういう理屈をどこかで学んだほうがいいんだ。皆さん一人一人はよく分かるんですけど、小学校にお伝えする、役目の人人が、そういうふうに学んだほうがいい。算数が一番面倒くさいけど、国語だったら、簡単に言えば、幼稚園、保育園で毎日のように本を読んであげて、「え？」みたいなことが重要になる。あるいは、図工だったら、幼稚園、保育園で毎日制作をやっていて、あんなの図工みたいなもんじゃないですか。

皆さん方にとっては当たり前なんだけど、小学校の先生はそれを知らないんです。そうすると、小学校の1年生に粘土という単元があるんです。初めて粘土に触れたかのような指導をするわけですよね。粘土ってこういうもんですよねみたいな。何か、見ているともったいないというか、3歳でやっているよな。もっと面白いことを、うちの園でも日常的でもやったな、あの子たちはというずれがあるよね。そういうことをもっと伝える。保護者も納得するし、小学校の先生も、それこそ今、架け橋とか接続とかいうことを実質化すると良いと思います。

○司会者 ありがとうございます。

今のところ、もうちょっと資料を使って補足していただくと伝わるかと思ったんですけど、いかがでしょうか。幼児期の学びから小学校の学びへというところで、皆さん、お手元は3ページでしょうか。

○無藤氏 この資料の5ページ、ナンバー5というところです。小学校の学びへとどうつながるのか。私の言い方で言うと面倒くさく書いてあるんですけど、幼児期は、要するに、身の回りの園の環境でのいろいろな活動とつながってドングリ遊びとか、積み木遊びとか、そういうものとつながっているんだよねということなんだけど、小学校になると、それをしっかりと自覚的にやっていくようになる。しかも、そこで使う環境と呼んだりするけど、主には学校の中の、生活科なら学校や地域の環境、国語は大体小学校の国語の教材ですね。そういうものの中で学んだことを、幼児期に学んだことを発揮する。

だから、例えば、小学校の国語の教材、1年生の教科書教材を見ると、特に1年生の教科書、1学期というのは、見ると、ほぼ絵本なんです。実際、最初は字のない絵本みたいなもので、その次に字が少しあって、でも、余り十分ではない絵本教材が出て、その次くらいに絵本教材、割と『おおきなかぶ』が多く出て、みたいにして少しづつ広がっていくんですけど、その1学期の教材を見ていると、もう園でやっているんです。そうすると、絵本で読んでもらったことを生かすと、子どもは活発に発言するわけです。それは気づいていない先生も、例えば、『おおきなかぶ』も、国語の普通の授業のやり方で言うと、「さあ、今日から『おおきなかぶ』というお話しなんですけど、じゃ、ページごとにみんなで読んでみようか」と言って、ある日、大きなかぶができるみたいな話じゃないですか。というのを読んで、「そうだね。わかるよね」という感じで、一通りゆっくり読んでいって、「じゃ、最初に出てきたのはおじいさんですね」みたいにやっていく。授業計画というか、結構あるんですけど、私などはそういう授業を見ていて、子どもたちは発言したくてしようがないんです。「おじいさんが出てくる」「最後、ネズミだよね」「猫とかさあ」、さんざん知っているわけだし、中には、絵本を読んでもらうだけじゃなくて、おおきなかぶごっこをやっているでしょう。それを発言させないで、「まあまあ、君たち、分かっているかもしれない。ここは黙っているんだよ」とか、なんか変な形というのか。だったら、幼稚期にやっていることをもっと1先生の担任が知っていれば、「君たちはそんなに『おおきなかぶ』の話を知っているんだね。君、『おおきなかぶ』ってどういう話か言ってみて」とちょっと言わせてみて、「なんだ。みんなこれでいいの？」。何かが抜けている。「猫もしてきたんだけど」とか、いろいろ足したり、中にはふざける子がいて「ライオン」。そうするとほかの子が「いや、ライオンはないんだよ。絵本がないし、おうちにいるものが出てくるから」、いい整理が出てくる。あれ、全員おうちにいるものが順番に出てくるんですけど、「へえ、どうして最後にネズミなのかな」、これは先生が質問したんですけど、「だって、最後はね、一番小っちゃいやつが出てくるんだよ」くらいは1年生でも答えられる。大きい順です。

というふうに、絵本の読み聞かせ経験を生かすと、もっと1年生の授業は面白くなるし、子どもは分かったことをどんどん発言できる。そういうことを主体的と呼ぶんじゃないかと思うので、そのためには幼稚期にやっていることをもっと小学校に伝えたほうがいいんだという感じです。

○司会者　ありがとうございました。

では、開始からおおむね1時間ほどたちましたので、ここで一旦、フロアの方々から質問を受けたいと思っておりますが、皆さん、いかがでしょうか。

○無藤氏 疑問に思ったことや、ふだんから聞いてみたいことや、午前中分からなかつた、この際聞いておきたいとか何でもいいです。どうでしょうか。遠慮しないでいいですよ。

そもそも、私の話がちゃんと理解できる人はいないですから（笑声）。安心してください。大抵分かんないという顔をします。

○司会者 皆さん、バッヂでしょうか。——素朴な質問とかでも結構でございます。——どうぞ、お願ひいたします。所属とお名前をお願いします。

○＊＊＊ 所属はないということでいいですか。＊＊＊と申します。

反省しないほうがいいというお話で、20年版の教育要領解説には反省や評価なんですけど、30年版では反省という文字が一掃されているんですが……

○無藤氏 あ、そうですか。

○＊＊＊ 「あ、そうですか」ということは無関係だったんですか。素朴な疑問です。

○司会者 幼稚園教育要領、確かに抜けております。実は2017年改訂で、その辺いかがでしょうか。

○無藤氏 あ、そう（笑声）。最近のは反省という言葉は使っていなくて、その前は使っていたの？

○＊＊＊ 評価、改訂のほうの…………。

○無藤氏 そうか。解説版ですよね。

○＊＊＊ 本体も。

○無藤氏 本体もそうですか。そうか（笑声）。私はそこの改訂の責任者でしたけど（笑声）。本文はちゃんと責任持っています。解説は、実を言うと教科調査官が書くところで、私などは責任がもてないのでしょうね。

それは置いておいて、そのときにどういう議論をしたかは忘れましたけど、多分、反省という否定的なニュアンスが嫌だったのでやめたんだと。振り返って改善するというためにやっているんだから、改善点を見つける。私が悪うござんしたという感じの反省にしないということ。反省が広がると、誰が悪い探しになりますけど、そういうことじゃなくて、私たちの保育は既にいいんだけど、もっとよくできるんだから、よく考えてみよう？みたいな手法を出されるんですが（笑声）つもりだったようです。

これはいつですか。

○司会者 これは2017年版なんですが、改訂については今日のテキストと同じ、これが前回までは「反省と評価を適切に行い」と。

○無藤氏 そうですよね。それは明らかに意図的に反省を落としております。評価というのは、そういうニュアンスはなくはないんですけども、要するに評価というのは個々の保育者がいいとか悪いじゃなくて、カリキュラム、指導計画として、それがうまくいっているのか。適切かどうかというよりは、今いる子どもたちの今の状況の中で、それが合っているかどうかなので、というのをどうこう見ましょうねという趣旨でつくったはずだと思います。

○司会者 ありがとうございました。

ほか、いかがでしょうか。

○無藤氏 どうぞ、この際何でもいいですよ。日頃から疑問に思っていることでもいいです。

○司会者 お願ひします。

○＊＊＊ 本日は講演ありがとうございます。○こども園の＊＊＊と申します。

先ほど、保護者への伝え方のところで、先生がメインでお話をされていたのが、どちらかというと小学校前のお子様のお話だったと思うんですけども、それこそ、その前の質問であったような、乳児期の乳児の面白さというか、小っちゃい成長を保護者の方にお伝えする上で、こちらの熱量と、保護者の方との見方が違うのかなというところがあって、そういうところまで、この子の小っちゃい遊びとか、ちょっとした出来事にすごい大きい成長を感じるみたいなことを同じ熱量で伝えるのは難しいなと思うんですけど、何かあればお願ひします。

○無藤氏 ゼロ歳、1歳の園での保育ということで、私は、しようがないんだけど、親御さんから子どもの成長の初めての何かを見る機会を奪っていると思うんです。別に保育士の人を非難しているわけじゃないですよ。だけど、子どもが初めて立ち上がった瞬間を見るのは、親じやなくて保育士なのかなということがある。なんていうか、私は複雑な思いをするんですけど。というのも、やっぱりゼロ歳後半から満2歳くらいって、日々初めてなんですよ。それを見ることはなかなかないです。だけど、保育士のほうは見るわけで、そこで必要なことは2つあると思うんです。

1つは、本当は毎日全員のを見つけるのはしんどいから毎日とは言わないです。週に1

回でもいいんだけど、今週の初めて。表題は要らないんですけど、言うならば、今日の初めてというものを伝えてほしいと思います。

さっきの立ち上がったときの、最初、立ち上がるけど、すぐ尻餅をついちゃいます。これは立ち上がりかけて落ちちゃう。おむつしているから余計に、こんなお尻で、ふらふらしながらも何秒間かすごい重大な場面なんですけど、そういうことを含めての初めてです。

家庭でできない初めてもたくさんあるんだけど、前に保育所で見たのは、月齢でいうと、ゼロ歳児クラスだと思う。1歳半ば過ぎていたと思うんだけど、まあ歩けるくらいです。庭に出て、庭にちょっとした小山があるんです。小山といつても、子どもにはちょっと高いですけれども、1メートルかもうちょっとかもしれない。そこに2、3人の、歩いていくけど、ちょっとヨチヨチみたいな。手をついたんだけど、多分歩いて登ったんです。だもんだから転ぶ。四つんばいというか、山だから壁みたいなんです。そこにこうやって登り始めるんです。登り始めたけれど、それようにできたものじゃないからつるつるしていくので、頂上の手前まで行くと、するすると滑るようにしています。それを数回やったわけです。数回やって、たまたま足がちょっとしたところにかかる登れたのね。それをこっちで見ていて、実を言うと担任もその山にいるんです。いるんだけど、担任は全然手を出さず見ているんですが、てっぺんまで登ったんです。そうしたら、その子がゆっくりこうやって立ち上がって見回したんです。そして、僕と担任は、声には出しませんけど、「おおー」って感じになる。それで向こうに行きましたけどね。

こういうものを親に伝えたいもんだけど、動画を撮っていなかつたから、写真は撮っています。なかなか難しいんですけど、そういうものを始めるんです。だから、今のなんかは家庭で初めてにならないよね。家庭でそんな山に登らない。だから、園のほうが初めて体験が豊富にあると思うんですけど、そういうものをどう伝えるかということで、さっきも言ったけど、写真を使うとすごくいいなと思うんです。しかも、その親のお子さんの初めて。クラスの何人かがしたよじやなくて、特に小さい子の親は納得しない。うちの子どもはと、というのが一つあるんです。

もう一つの問題は、背景の親は、発達をもっとぱんぱんぱんと進むと思っているんです。そうすると、例えば、立ち上がったら歩くよね。歩いたら、あそこまですたすた行けるね。今日立ち上がったら、翌日歩き出して、その週末には買い物センターで一緒に行けるみたいな感じのことなんだけど（笑声）、1年かかるわけです。だから、普通に1歳過ぎに歩き始めた子だって、階段を上るのは大変だから、階段を上るのは1歳後半くらい。下

りるのはもっと難しいんですけども、このくらいの段差というのは1歳後半から満2歳くらいの子は結構冒険もあるし、挑戦もあるんです。特に下りるのはね。なぜか知らないけど、飛び降りようとするわけです。そうすると、ここだと数ミリで1歳後半だとちょっと厳しいけど、中にはね。そういうときに見ていると、かなり迷いながら挑戦している。

ああいうのは、いきなりぽんとやらせるとけがするので、その子なりにできることですけど、そういう特別なことはゆっくり発達するんじゃなくて、そういう発達の時間をかけて順序よくいって、それをある程度保育士のほうは、そういうことが散歩中幾らでもあるので勉強していくとか。

個人差に十分気をつけるというか、歩き出すのも生後11か月から1歳6か月前後くらいの幅があって、早くから歩き出すほうが運動神経はいいとも思いますけど、だからといって1歳半から歩き出す子が異常だという意味じゃないんですね。そういう子もいるんです。慎重さと、筋肉が発達する問題ですけど、そういうこともあるので、早いほうが偉いという話じやなくて、順番を踏んでいくということが重要なんで、そういうある程度の順番を念頭に置く必要があるんです。

それにもう一つだけ加えておくと、昔、ある時期は、例えば、ハイハイをして、つかまり立ちをして、歩き出すという順序が重要だという説もありましたが、その後の数十年のいろんな様子を見ていると、そんなことはないんです。つかまり立ちが早くなります。ハイハイの期間が長い子もいます。ハイハイは肘でやる子もいるけど、手が突っ張る子もいるし、熊みたいな子もいるし、いろいろなんですね。発達の多様性といいますか、というような研究はすごく進んでいるんですけど、そういうこともある程度承知して伝えていくということが必要じゃないですかね。

○＊＊＊　ありがとうございます。

○司会者　ありがとうございます。

ほか、いかがでしょう。——はい。

○＊＊＊　今日は講演ありがとうございました。N市の幼児教育・保育センターの＊＊＊と申します。よろしくお願いします。

2つ質問があります。1つは、幼児期の終わりまでに育みたい「10の姿」というのは、次の学習指導要領でもまた継続されていくのかということ。2つ目ですけれども、今年度から立ち上がった幼児教育・保育センターなので、小学校の先生に幼児教育の大切さを伝えようとしてはいるんですけども、小学校教育の前倒しであるとか、ルールや規則で縛る

うとするという姿がやはりあります、幼稚園教育の大切さの理解が進んだというような好事例があれば教えていただけたらと思います。

○無藤氏 最初に「10の姿」が残るのかについては、それは私は知りません。そちらで調べてもらっていいですか（笑声）。決まっていないんだから。

それから、文科省によると、幼稚園教育要領の改訂の議論のワーキンググループが始まるそうですけど、そこで初めて議論する話なので、そこに私は入りませんので。そりやそろです。ああいうのでも委員にはちゃんと年齢があるんです。そりや幾ら何でも入らないんですけど。

私は、実を言うと幼稚園教育要領の改訂に3回関わっています。そんな最長不倒距離なんて要らないんです。ただ、去年、文部科学省、幼稚園教育課で、教育課程がどうのこうのという報告書を出したんです。10月かな。あれは別に要領改訂そのものではなく、これまでの議論をまとめたものですけれど、一応「10の姿」をしっかりと生かしていこうという方向にしたので、多少文言を直すというのはもちろんあると思うんですが、大きく変えることはないだろうと予想しています。

2番目に、小学校に幼稚園教育の意義をどう伝えるかという話は日本中の大問題なんです。なかなか難しいわけですけれども、いわゆる架け橋プログラムという中で数年やってきた中で、こんな感じ、あんな感じということがいろいろ出てきましたが、まず一番基本となることは、小学校の先生が、幼稚園、保育園の保育を見ることなんです。見るだけじゃなくて、それを巡って、幼稚園、保育園の先生方と話し合う時間が必要なんです。

本当は小学校の授業も幼稚園、保育園の先生も見ていくこと、両方必要だと思います。特に小学校の先生にとって、保育で子どものことをいろいろやっている様子を見ても、なかなか分からぬわけです。そういうものを見に来た人たちに、特に小学校の先生に感想を聞くと、「楽しそうでよかったです」とか、「幼児は遊びで楽しく過ごすことが一番大切だと思いました」みたいな感想が多いんですけど、冷たく言うと、遊んでいるだけだよねという意味だから、そこで何か学んでいるということは全く分かっていないわけです。

そうすると、ある人たちは、小学校でちゃんと教えるんだから、幼稚期は遊んでいるだけでいいです、遊びとか言わなくてもいいよ。小学校の学習は邪魔しないでくれ。じゃ、どうすればいいんですかというと、いろいろあるけど、例えば、小学校の授業は45分だから、その間、静かにいるくらいできればいいんじゃないですかとか、鉛筆を使うから鉛筆の持ち方を練習してくれると便利ですね。要するに、それ以上期待がないわけです。その

2つのことが割と言われるかもしれないですけれど、この2つが言われているところは駄目です。

そもそも、小学校の授業で45分静かに子どもが座っている授業なんて今どきないです。45分の授業って、小学校1年生の場合には10分とか15分刻みで細かく分けて、最初に先生が説明して、次に子どもたちでちょっとしたゲームをして、その後、先生が黒板の説明をして、その後、それぞれの課題を個人ごとでやって、またそれを発表させてみたいな組み合わせが多い。結構動きが多いんですよね。だから、1年生が45分座っているだけなんて見たことないですというのが一つ。

もう一つは、静かに座っているということ以上に、興味を持てるように仕向けて、注意を払って聞くことが必要なんです。じゃ、興味を持って聞くというのは、自分が知っていることを発言できるということか。さっき、『おおきなかぶ』の授業の話をしたけど、自分たちは『おおきなかぶ』を十分知っているのに、「まあまあ、君たちが知っていても、ちょっとここは黙っていて、先生がやるから」と一からやっているうちに飽きてくるわけです。じゃなくて、知っているなら言わせればいいというふうに小学校側も変わってくるところは変わってくるというのが一つです。

それから、鉛筆の持ち方は大事だよねという話。もちろん大事なんんですけど、鉛筆の持ち方を練習してくれということなんだけど、そんな小学校に入ってから練習すれば済むのと、鉛筆の持ち方って、皆さん方、ペンでもいいんだけど、こう持つね。字を書いて、今、自分でやっていて分かると思うんだけど、鉛筆の持ち方ってこういうやつですね。これって、親指と人差し指と中指の間に持って、特に人差し指がきゅっと動くことによって調整しているんです。

もう一つ、自分で書いて分かるけど、手首とか、この辺をテーブルにくっつけています。これを浮かせて書けないんです。書道はできますけどね。つまり、どうしてかというと、ここをくっつけて、こういう小さいところに細かい模様を書くためには、この肘と手首と、手の第一関節、ここが全部固定していなきやいけない。動かしたら駄目です。手首が動くと小さい字を書けなくなるでしょう。この先で調整するんです。それは、文字というのは小さい模様だからなんです。これが、例えば、同じように字でやると、幼稚園、保育園でレストランごっこをやって、お寿司屋さん、「おすし」と看板を書くじゃないですか。そのときに鉛筆の持ち方をしないので、クレヨンか何かでもっと握っても何でもいいけど、力を入れて大きく絵筆を使うようにやって書きます。だから、字の書き方って本

当はいろいろあるわけです。

例えば、これはサインペンですけど、こういうときに、この持ち方って、特にこれはペンだからあれだけど、チョークだと、鉛筆の持ち方と違うんですよ。どうしてかというと、こういうふうにくっつけて書くわけじゃなくて、浮かして書くわけです。だから、実は鉛筆の持ち方で書くものは小さい字を書く場合です。

じゃ、それはどうして成立するかというと、説明したように、肩、肘、手首、関節がこ^うある。その回転をコントロールという腕の操作の発達です。そうすると、保育園の先生は1歳児を持っていると、1歳の子は殴り書きをします。殴り書きというのは、何かを持って、どう持ってもいいんだけど、こうやって書くよね。ということは、肩関節をこうやって回すわけです。肩の関節を中心とした円運動だけど、そういうところが少しずつ精緻になっていくとコントロールが外側に行くというのは昔から知られている運動の発達ですけど、まさにそうなるんです。

だから、1歳半ばくらいに肩の関節の動きが、だんだん3歳くらいになってくると、もう少し細かい、肘くらいというふうになっていって、細かい字を書ける子が年長でもいますけど、知能とちょっと違うところがあって、運動神経の細やかさです。と同時に、もちろん字が書けるわけなんんですけど、そういう問題と。

もう一つ面倒くさいのは、日本語の平仮名というのは書き順がやたら難しいんです。だから、幼児に教えるのに余り向いていないんですよね。読むのはいいです。読むのは絵本だって、かるただって。あるいは、よくあるのは『名前』ですね。自分やクラスの友達の名前、ああいうのを読むのは割と4歳でも成功するけれども、書くほうは難しくて、特に幾つか難しいやつがある。難しいものの1つは「あ」です。いまだに余り上手じゃないんだけど、「あ」って本当に変な字で（笑声）、最初の横棒が長いと駄目じゃないですか。こういうふうにすると駄目なわけです。変じやない？ だから、最初が少し左に寄っているんですけど、こんなの分かるかと。真っすぐ書くやつ、縦棒じゃなくて、ちょっと斜めにする。少し飛び出してこういうふうにやっている。ここも飛び出すんですけど（笑声）。そんなことを言われても（笑声）、思いますよね。意味分からない。何か1000年くらいの歴史の中でつくられちゃったから、しようがないんですけど。

ですから、余り書き順まで含めて幼児に教えるとなると、やたらめったら細かいドリル、訓練になるんで、まあ指先コントロールが十分できる、どの子もできるのは1年生の1学期くらいだから、そのくらいがいいんじゃないかなと多くの小学校の先生に伝えていただ

きたいです。

いずれにしても、そもそも小学校を楽にするために幼児教育があるわけじゃなくて、幼児期には幼児期のすることがあるんだよ。じゃ、幼児期にすることってなあにということをもちろん積極的に言えなきや駄目です。遊ぶことは大事だという抽象論じや駄目です。遊びの中にも、体を動かす遊びもあるし、ルールを守ってやることもあるし、絵を描くのも楽しいし、何人も友達と。例えば、鬼ごっこをするにしても、そのルールは、こおり鬼だの何だので複雑になって、ドロケイって言う、ドロケイって、要するに集団の鬼ごっこです。集団対集団です。そういうものを年中くらいでやっているんです。いつだか見ていて、僕一人笑っておかしいんだけど、一人の子が逃げて、もう一人が捕まえようとして必死で追いかけているんだけど、だつと庭を回っているんです。その後には、余りにすごく走っているから、周りの子が見ているわけ（笑声）。よく考えたら、警官の子はぱっとやれば捕まるんです。ここで見ているから。だけど、目の前の子を追っているんですけど、余りルールが分かっていないんですね。一応のルールは分かっているんだけど。要するに、鬼ごっこ系のルールは複雑なんです。それだけ理解、頭を使わなきゃいけないと。

いろんなことを小学校の先生に伝えていかないと、遊ぶことは楽しいまではみんな知っていますけど、遊ぶことは楽なことではないな。そこが問題かなと思います。

○司会者　ありがとうございます。

ちょっと今のに絡めて、「やってみたいが学びの芽」の文科省の動画とか、資質・能力などはいかがでしょうか。

○無藤氏　「やってみたいが学びの芽」なんで、そこは今日の私の話とも絡めていて、即学びとは言わないので、その辺は今後も、どう説明するか難しい問題として取り上げられていくと思いますけど、学びの芽みたいなものがあるんです。これがどんどん展開していくようになるという話をしたいわけですけれども、どの辺で学びと呼ぶかは難しいところで、水道を流して、当たり方が違うなと学んだというと、ちょっと行き過ぎな感じがしますね。それほど定着していないです。どうしてというのがそんなに分かっていない。

だけど、芽でわかる。それが次々に出てきて、例えば、別なときに、2、3歳、こういうカップを持ってきて、最初はただの水を入れていたんだけど、ぱっと水道も勢いがあるから跳ね返りますよね。それで、ふと興味を持ったらしく、ひっくり返す。もっと跳ねる。横にする。違う容器でやってみると、水の反射というのか、跳ね返りが器の傾斜みたいなもので変わっていくので、言葉では言わないでしょうけど、ちょっと分かってきて

いるよねみたいなことです。

もっと年長くらいになれば、跳ね返りという概念が多分できてくるから、水が跳ね返るたびに、ボールをぶつけて道路へ出るのとか、さらに光が来て反射するとか、いろんなことを跳ね返るで捉えられるかもしれません。そうすると、何か小学校の先生たちでも、見えやすいかもしれませんね。そういう学びというのは少しずつ発展していくものですから、どの辺を呼ぶかによるけれども、そういう小さい年齢から、年上、年長くらい。そして、その辺り、しっかり広がりかつ、みんなで安定してきたとは言えるのかな。跳ね返るという現象がいろいろ見えてくる辺りになると、小学校への生かし方というのがかなりはつきり出てくるように思います。

○司会者 ありがとうございます。

あと15分ほどになっておりますが、ほかに、皆さんから質問とかおありでしょうか。お願いします。

○＊＊＊ A市のM幼稚園の＊＊＊といいます。今日はありがとうございました。

今の学びの芽のお話なんですけど、4歳さんが、ちょうど今、月のお話をしていて、実はすごい少人数で、4歳児クラスが5人しかいないんです。その5人が5人とも、月の数が違うんです。「僕は10個やと思う」「僕は3個」「私は1個」。それぞれそういう、「え？」と思うような感じなんですけど、担任の先生は面白がってというか、「あ、そうなん。なんでそう思う？」と言ったら「バナナみたいな形のやつがきのうも月の家から出てきてな」とか言って、子どもたち、自分の考えていることを言うんです。またすごいなと思うのが、親ちゃんたんとそれに乗ってやっている。その話を聞いた1年上の年長の子たちが、「え？」

何言うとん。1個やで」(笑声)。きっと何か本とか知識を得てなんですけど、これはこのまま置いておいたらいいけど、子ども同士のあれだから仕方ないなと思いながら、また担任間で、どんなふうに話をしていくんかな、子どもたちの思いと、現実と、それから学びの芽というところで、どんなふうにやっていくのかなというのを今まさしくやっているところなんですけど、無藤先生はどうお考えかなと思って、教えてください。

○無藤氏 月の話として、1つは、年中でそういうことを思っている子がいたとして、どういう理由というか、どこでそう思ったかを割と詳しく聞くと思うんですよね。単に思いつきもあると思うんですけど、時々。こっちの子が2個と言ったから10個とか、半分冗談みたいな、空想みたいな子も当然あるわけだし、そうじゃなくて、例えば、絵本で誤解することを時々見るんですけど、月の満ち欠けの説明。そうすると、これはこうなって、こう

なってくると10個くらい月が並んでいるんですけど、ああ、そうなんだ、本当にそうなんだという誤解とかあるんです。あるいは、本当に空想というか、月に何か住んでいて、いろんな月があってということだと、月と、どこかで聞いた、すい星、金星みたいな、惑星の話がごっちゃになっているとかあるわけだけど、いずれにしても否定することもない。どうせ、どこかで気づくんで。でも、理由を言えるのは、どこで見たとか、だからということが大事なんで……

○＊＊＊ 証拠写真を撮ってくる。

○無藤氏 どこで？

○＊＊＊ 家から、お母さんに写真を撮ってきてもらって、「ほら、これとこれ、違うやろ」と言って「あ、ああ……」と。

○無藤氏 違う形の月がある。

○＊＊＊ そうです、そうです。

○無藤氏 それはいい考えだと思うんです。月の満ち欠けという概念がなければ、ある日、三日月というか、そういう月が出るし、別なときに丸い月って、いろいろあるんだなというのは、ある意味で正しいですね。同一物が変化したということが分かっていなければ、丸いものがいつもあるというよりは正確に見える範囲でね。だから、そこは感心してあげたほうがいいなと思うんですね。なるほど、そういう考え方もある。こっちに、2個なり1個なりというのは、「先生もよく分からないから調べておくよ。皆さんも調べてね」とか、いずれ気づくわけだから。でも、とりあえずそういう発見は貴重だと思うんです。

小学校の何年生かな、月の満ち欠けってあるんですけど、最近、夜暗くて、明るい月を見る機会が子どもたちに少ないせいもあって、月の満ち欠けって本当に誤解が多いんです。だから、そういう意味で、幼児なりに捉えるというのは面白いことで、いわゆる科学的なものに沿う理由は何もなくて、どうせそこに……ということなんです。

それと、余計なことを言うけど——これは余計なことです。月が1個というのは地球の話で、木星は衛星を月と呼ぶ、十数個あります。——へえって感心しないでください（笑声）。小学校でやるんです。

木星と衛星は双眼鏡で簡単に観測できます。幾つかあるんですけどね。だから、月に興味を持つというのは、それ自体いいことだと思います。

○司会者 ありがとうございます。

○無藤氏 特にまとめはないです（笑声）。

○司会者 どうぞ。

○＊＊＊ 貴重なお話、ありがとうございます。Aこども園の＊＊＊と申します。

乳児の先生たちと環境のことを考えていて、子どもが遊び込むために、どういうふうなお花をつくったらいいかとか、おもちゃももちろんそうなんんですけど、どんな素材をしたらいいかとかいうことをいつも考えながらしていて、ただ、やはりヒヤリ・ハットとか、事故につながることも多いので、ゼロ歳児でも、こういう絵本だったら紙がどうこうしてしまうとか、固いもの、全然置かないわけじゃないんですけど、投げたり、たたいてしまうということがたくさんあって、あと、外の環境でも、どこかに放り投げて下に落ちてしまったりとかもあつたりするので、危険と環境をすごく悩んでいて、でも、けがでも、危険でも、なくしたいわけじゃないんですけど、何かその辺でいいアドバイスがあればお願ひします。

○無藤氏 その辺になってくると、正直言うと私の手に負えないでの（笑声）、ゼロ歳の保育のベテランの方のほうが詳しいでしょうけれど、極めて原則的なことを言えば、安全の基準というのかな、こういうことを守りなさいというのは方針がちゃんと出ていて、ネットでも見られますので、それはちゃんと守らなきゃいけなくて、割と手づくりの玩具、100円ショップで適当なものを買ってくる。安全基準を守っていないものが、当たり前ですけど、あるわけですよね。だけど、そこは承知して十分対応する。

例えば、100円ショップの小さいこういうもの、何かを持ってきて、面白いんですけど、やっぱりふとしたはずみ、飲み込んだらアウトとか、そういうことはちゃんと守るべきですね。

もう一つは、その年々によるんで、そのときにはいる10人くらいのお子さんの様子次第なんです。本当に、ほぼ口に入れない子もいるんです。だけど、何でもとりあえず口に入れ子たちもいるんです。どっちかということで、えらく話は違うし、口に入れて、べっと出すことが大事なんだけど、かむのかなという子ね、口に入れたままというのがあるんです。ただ、紙について言えば、まあ実害はないです。実害なくても親は子どもを心配しますから、それは見ている？ということですけど、見ていない30秒、1分でどうにかなるものはやめたほうがいいですね。ビー玉みたいなものは、瞬間的な。だけど、30秒、1分以上かかるものは、普通、見ている範囲では大丈夫かなと。そういうくらいな範囲だと思いますね。

さらに言えば、自分たちが手作りで発明するのはいつもいいわけではないんで、ぜひお

茶大のやっていることをまねをしたほうがいい。試されているんだから。とにかく、どこかで既にやっているものは、まあまあ大丈夫だろうというふうには思います。ゼロ歳、1歳の場合には、自分たちが発明して、手作りで、すぐ与えていいとは限らないということは気をつけるべきなんです。

あとは、それと面白さは全然別なことなので、なおかつ面白いものにどうするかで、市販のものは高いですから、手作りで面白いものをどうつくるかというのは、実は本とか雑誌であふれています。今、ネットでもあふれていますけど、ネットの情報が割と危ないので、本当に余り試していないです。危険な素材を使っているものをたまに見ますから、印刷媒体のほうが安全だなと感じています。

そのくらいですかね。済みません。

○司会者 ありがとうございます。

長時間にわたり、どうもありがとうございました。間もなく3時半になるところで区切りたいと思います。無藤先生に拍手で……。

(満場拍手)

○無藤氏 最後に1つだけいいですか。

○司会者 お願いします。

○無藤氏 私の午前中の話はやたら原理原則的な話で、午後の話はやたら具体的なんですけど、ぜひ皆さんの中へ、午前の話と午後の話を、つながっているはずなので、つなげてくださいということで終わります。どうもありがとうございました。(拍手)。

○司会者 ありがとうございました。

では、ここで司会をバトンタッチして、乳児保育部会の先生にお願いしたいと思います。

○乳児保育部会 司会者(森永) 無藤先生、瀧川先生、ありがとうございました。

明日、早速、身近なところから、子どもの面白がっていることを見つけて発信したり、保育者同士で少し雑談したりするなど、小さなできることを始めてみようかなと勇気をいただけた時間になりました。ここにいらっしゃる皆さんと、ぜひ今後、様々な共鳴が起こっていくといいなというふうに感じています。今日は本当にありがとうございました。

皆様、もう一度大きな拍手をお願いいたします。

(満場拍手)

最後に、本フォーラムを主催しております一般社団法人日本乳幼児教育・保育者養成学

会乳児部会より御案内させていただきます。

本日は第3回のフォーラム、Aコースに御参加いただきまして、誠にありがとうございます。事務連絡が2点ございます。

1点目です。入り口にて配付しておりました事後アンケートへの御協力をお願いします。また、研究への御協力を賜ります先生方には、同意書を朝の受付でお渡ししていると思うんですけども、そちらのほう、御記入の上、お帰りの前に、私、箱を持って後ろに立つておりますので、必ず同意書のほうにサインをしてお渡しいただけますようお願い申し上げます。

2点目です。お時間のあります先生方は、この後よろしければ、ポスターや書籍、ぜひ御覧ください。

事務連絡は以上となります。

来年も乳児保育フォーラムは続いてまいります。また来年も皆様と一緒に保育を語り合い、学び合えましたら幸いでございます。

これでコース全てのプログラムを終了いたします。ありがとうございます。

では、代わります。

○司会者 本日はどうもありがとうございました。

一点、総合保育大学としましてお話しさせていただきます。

本日、お渡しさせていただいたものの中に、大学院のオープンキャンパスというものを、実は今年度、初めて行うことになっておりまして、11月2日にございます。こちらのほう、ちょっと考えてみようかな、勉強してみたいなと思われる方々はぜひ御参加いただければと思っております。

もう一つは、「生きる」というチラシが入っておりますけれども、大川小学校、東北の震災、あそこの小学校のところでの話というふうな映画の上映会を本学で行います。9月21日でございます。またこちらのほう、参加申込みがありましたら、QRコードからお申込みいただければと思います。

以上、大学としてのアナウンスです。

これにて、皆さん、解散でございます。ありがとうございました（拍手）。

——了——